くりはら Ijuーtju Newsletter
3 2019 №13
宮城県 栗原市

栗原市認定
＼ まちクリエイター事業報告会&認定式 ／

まちの魅力を創造する

可能性を試せる”場”がここにある。

3月3日、若柳柳徳寺を会場に「栗原市まちクリエイター事業報告会＆認定式」を開催しました。
市では、2017年から若者たちの新しい交流の形として、若柳地区にある拠点施設（通称:ピンク基地）を核として、縛りのない自由な活動ができるプロジェクトを始動。

2018年度では全国から約30名の若者が集まり、地域の人たちを巻き込みながら独創性あふれる活動を模索・展開した中で、実践された15名の皆さんを今回「栗原市まちクリエイター」として公式に認定！
今号では、このプロジェクトに参加した若者たちの想いを届けます！

「とりあえず試してみる」試行錯誤してみよう。

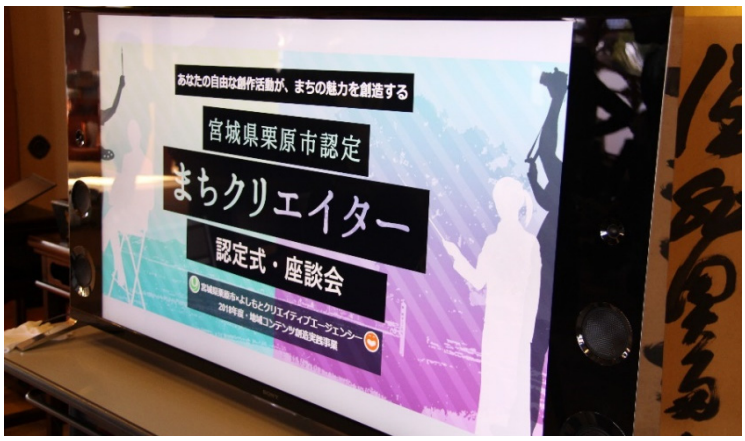
プロジェクトプロデューサー
若新 雄純 氏

僕が企業や自治体をお手伝いしているプロジェクトにおいて、テーマにしているのが『とりあえず試してみる』というのがコンセプトにある。とりあえず試行錯誤してみようと。
このプロジェクトも、誤解されることが多いんですけど、いろんな人が集まって、まちに関わってくれた人を認定するという企画そのものが、どんなふうになっていくのか。うまくいくのか、何が足りないのか、どう発展させていけるのかをやりながら試すというものだったんですね。

自治体が認定することが、『価値』になったらおもしろい。

全国でいろんな自治体をお手伝いしていて、地方に行けば行くほど一番大きい企業が自治体で、一番就職したい企業も自治体で、自治体ってすごい存在だなということが分かって、その自治体が公認したり、認定したり委託するというのは、若い人にとってすごい価値があるということが分かってきました。

自治体が認定するということがひとつの価値になったらおもしろいなと思って、試してみたんですね。



『まちクリエイター』の価値があるのかどうかは『これから！』

「まちクリエイター」という称号自体に価値があるかどうかというのは、全然まだ分からないんですけど、その“認定する”ということを通して、いろんな人が集まってくれたことは事実で、まだ、改善点はいっぱいあると思うんですけど、続けていくことで、ちょっとずつ色んな人が集まってくれる流れができたら良いなと思っています。

そして、これが続いていけば、まちクリエイターの価値も上がっていくと思うので、皆さんと相談して、この後、どう続けていけばいいのか、今年の課題は何だったのかということを考えながら継続してやっていけたらなと思っています。

本質は、実験の可能性を楽しんでもらうこと。

この企画のポイントは、認定された企画内容がどうだったとか、称号の価値はどうか、ということよりも、初めて栗原に来てくれた人に関わってもらって、認定するということをきっかけに、何がこれから生まれてきそうなのか、実験の可能性みたいなものをみなさんに楽しんでいただきたいということです。

従来の自治体の公共事業と違って、ビルを建てるとか、新しく拠点となるセンターを造るために、何千万円、何億円もかける事業じゃなくて、工夫して空間をつくるというソフトの事業です。

毎年毎年、必ず全てがヒットして思い通りにいくわけじゃないかもしれないですけど、莫大なお金がかかる事業じゃないからこそ、ひとつひとつは小さくても、ずっと続いていって、大きな変化に繋がるような、そういう事業になるといいなと思っています。

これから、このプロジェクトをキッカケにどう発展していくかを今日の皆さんの話を聞きながら考えたいと思います。

くりはら
まちクリエイター

まちクリプロジェクトの『これから』に向けて

まちクリ 座談会

まちクリプロジェクトをきっかけに、栗原をまったく知らなかった若者が集まり、栗原をフィールドに新たな創作活動が生まれました。認定されたまちクリメンバーとプロデューサー若新雄純さんが、まちクリの『これから』について語り合いました。

都会とは違う、人と人のつながりだけで入れてもらえた。

【若新】まずは眞野さん。ハンドパン奏者という、都会ですら認知されていない中で、この栗原で活動するというのは、すごいよね。

【眞野】最初は、栗原に来てすごく不安だらけでした。受入れてもらえるのかとか。なので、とにかく色々な所に顔を出してハンドパン演奏するしかないと思って演奏させてもらったら、すごく楽しんでもらえて、ほかのイベントにも呼ばれるようになって、良い旅ができました。

【若新】ハンドパンの路上演奏をやるとしたら都会にはいっぱいあるけど、栗原ではほぼ不可能じゃないですか。でも、そこじゃないポイントを眞野さんは見つけたような気がするんですけど。

【眞野】見つけましたね。人のコミュニティみたいなものがあるので、誰か一人がおもしろいと思ってくれると、それが人伝えに広がっていった。
都会とは全然違って、栗原の人と人のつながりだけで自分たちの仲間に入れてもらえたみたいな。そこが発見でしたね。

【若新】路上演奏って、人がたくさんいる都会じゃないと成立しないと思われがちだけど、逆に田舎に行くと「あの施設でどう？」「うちのイベントに来てよ」とか、人伝えで舞台が与えられるみたいなのは、新しいかなと思っていました。
路上に代わる新しいローカルネットワークの中で、作品を舞台で見せるアーティスト活動のひとつになるかもしれない。

学校では知ることができない 学びのフィールド

【若新】桐井さんは、東京から来て、服を作ってくれたじゃないですか。普通に学校で服のことを勉強していたら、栗原を知ることもなかったと思うんですけど、参加して何か変わりましたか？

【桐井】学校では素材や生地の勉強はしないので、実際に工場に行けてお話を聞けたのは、凄くおもしろくて勉強になりました。

この服を作ろうと思ってから、もっと若柳地織を知るために他の伝統工芸品との違いを調べに行ったり。今までは、布から形を考えていたけど、素材、コットンから考えるように変わったかな。

【若新】東京では工場に直接足を運んで、試しに生地を提供してもらって作るというのは難しいんですね。だから、それが知られて広まるといいですよね。栗原に行くと、素材と一緒に作れるとか。

実は、田舎はクローズ（閉塞的）な雰囲気？

【若新】逆に地元側としてはどうでしょうか。このプロジェクトが始まって変化したこととかありますか？

【安食】はじめはメンバー間で色々あったんですが、若柳を良くしていきたいという気持ちは同じなんだと思えたら、共創して頑張っていきたないという気持ちが生まれてきました。

ただ、この活動を知っている人が若柳の中でも少なかった。知っていても一歩踏み出すのが怖くて、ピンク基地に行けない、というような。なので、もっとオープンな雰囲気を持ちつつもバズってるというのが、これから継続する上で、非常に大事になってくるのかなと思いました。

【若新】僕、他のまちでも移住プロジェクトをやっていて田舎の人って「どんな人にも来てほしい」って最初は言っているのに、価値観の違う人とかが来ると、案外、受入れるのが難しかったり。実は田舎ってクローズ（閉塞的）なんだみたいなことを活動する中で分かることも多かったりします。

松井くんは、住みます芸人として栗原にやってきて、その点はどう感じましたか？

異文化の人との”噛み合わない”ことを、活動を通して、どんどん起こしていこう。

【松井】関西とは全然、地域性も文化も違って、人種が違うんちゃうかっていうくらい何を話してもリアクションが違う。
時々、分からない言葉が出てきて、会話にワンテンポ遅れたり全然ちぐはぐで、“何やったらええやろ”みたいなこともあって。でも、馴染んできたら、みんな可愛げのある人たちばっかりで、仲の良さは可愛げのある人がおるところなんやなと。

【若新】よそ者の人に分かりやすいまちのパンフレットを作ろうとか、外部の人が入ってきやすいような企画を作り込もうとするじゃないですか。でもそれって、関わり始めてみないと、何がズレているのか、何でうまくいかないのかっていうのは分からないじゃないですか。

この活動を続けていく中で、今後、異文化の人が来て、“噛み合わないぞ”みたいなことが、どんどん起こるのも将来的には、色んな人が来やすいまちという意味で、良いかなと僕は思うんですね。

「どうせ栗原では無理。」という思い込み？

【若新】参加するより、作る側にいたいという人が多いじゃないですか、そういう人が多いって可能性があると思うんですけど、栗原の人は自分で“つくる場所”を求めているんですかね？

【只見】地元の人の多くは、たぶん「どうせ栗原では無理」とか、「ここ、何にもないから」と探そうとしてない気がするんですよ。探したい人は、たくさんいると思うけど、情報が行き届いていない気がします。それと、企画しても人が来ないんじゃないかとか、面倒だから仙台に行っちゃうとか。
仙台から１時間で来れるってことは、逆に1時間で出られるんです。

”どうせ仙台”をひっくり返す。栗原だからこそできることを しつこくやり続ける。

【今井】ただ、逆に、仙台にいる知人が今回、お寺での音楽イベントで初めて栗原に訪れたんですけど、「教えてもらったカフェがすごく良かった！」とか、みなさんビックリして帰っていきました。それと、お寺でハンドパンっていうイベントそのものに衝撃を受けた人もいて。

これって、栗原だからできたと思うし、“どうせ仙台”というのをひっくり返したのをしつこくやり続けるというは、結構おもしろいんじゃないかなと。そういう手応えを感じた気がします。

【若新】良い発見ですね。「わざわざ頑張って栗原でやらなくても仙台に行けばあるから」という思い込みによって、単に起きてなかっただけで、案外、つくり始めると「あ、栗原にもあるのか」ということは、やれるかもしれないですね。

おもしろいことをするなら栗原。一緒につくる人も見つけられるのが田舎の魅力。

【今井】仙台や東京で制作活動やイベントをやるとすると、“人がいすぎることのハードル”が非常に多かった。
例えば、渋谷の公園で一瞬だけロケをしたいとしても役所の対応がすごく冷たかったり、手続きが嫌がらせのように何段階もあったりして。

でも、栗原だと「やろう、やろう」って、パッとできてしまう。そこが大きな魅力というか、実は、“おもしろいことをするなら栗原”というのは、状況としてつくっていける気がしています。

【若新】都会に行けば、とりあえず、雑多に見てくれる人はたくさんいるけど、協力してくれる人を簡単に見つけられるかというと、そうではないと思うんです。

協力してくれる人を見つけるって、都会で結構大変じゃないですか。利害関係もあって、「それって儲かるの？」みたいな話になる。目に触れてもらうだけだったら、都会のほうが楽だけど、ちゃんとじっくり一緒にやってくれる人、一緒につくるという人を見つけるのは、田舎の魅力かもしれないですね。

やりながら探す。そんな生き方ができる場所。それが栗原。

【松井】僕から一つ、…みなさん、来年どうしはるんかなと。
【若新】確かに！人生の展望みたいなね。これって、まちクリエイターの活動にも繋がる話ですよね。
一昔前は、キャリアプランみたいなのがしっかり立ってないといけなかったと思われていたじゃないですか。来年はこれして、何年後はこうなるみたいな。

でも、案外、そうじゃなくて、やりながら探すってことの生き方みたいなものが浸透しつつあって、栗原ってそういう場所になる気がするんですけど。

【眞野】僕は結構フワフワしているので、今年は来週から台湾に行き、その後はあんまり決まってなくて12月には予定が入っているので、それまでの間、栗原でなんかしようかなと。
僕ははっきりしていない方がいい。決まっていると、そのとおり動かないといけないので。

やってみたいことを試せる。そんな場所の方が魅力があるのかもしれない。

【若新】これは、「えっ」と思われるかもしれないですけど、世の中には来年・再来年の見通しがはっきりしているのが良いという若者よりも、逆に敢えてはっきり決まらないことのほうが良いという若者が増えてきている。
結構それは、栗原が余裕を持って若者を受け入れることについては、僕は、可能性があると思うんですけど桐井さんはどう？

【桐井】こういうことをやりたいというのがあるので、ちょっとずつですけど、とりあえず１年は栗原でやってみようかなと。やってみて、もっと栗原でやった方がいいと思えば続けるし、栗原で学んだことを東京で発信した方がいいと思ったら、そっちでしたいと思うんで。

【若新】いいですね。結構、いろんなまちの移住政策では「安定して暮らせますよ」みたいなプランが作られてきているけど、あんまり若者に受けなかったみたいなんですよ。
それよりも、やってみたいことを試せる、そういう場所の方が、もしかすると、魅力なのかもしれない。

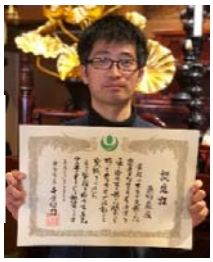
可能性を狭めない。まちが、一見理解できない若者を受入れる土壌が必要。

【若新】最後に、僕としてはこのまちクリを通して、こういう若者を求めていて、こんな活動ができると言えばたくさん人が来るということが、はっきり明確かといえば、まだ分かんないんです。
なぜなら、幅広くやったからこそ、眞野さんみたいなハンドパンを演奏したい人が栗原に来るなんてことは、全然予想できなかったわけで。
でも、いろんな可能性のものを、ここで試していいんですよ、ってことの方が、まだまだ大事なんじゃないかなって。
そのためには、まちが心を広く、柔軟に、一見怪しい、理解できない若者を受け入れてくれる土壌が必要だと思うんです。

まちクリエイター認定者活動概要の紹介

あっぱれ

今年度、認定された15名の皆さんの活動概要を紹介します。
まちクリプロジェクトは今後も継続して行いますので、新たな創作活動を楽しみにしていてください。



▲左から田口史織さん、大峯由美子さん

■栗原手しごとPR、だんすんぐKURIHARA、フォカッチャ作り教室

市民の皆さんに“まちクリエイター”の存在を知っていただくこと、一緒に楽しく活動する中でコミュニケーションをとって、外に配信していくということを目的にイベントを企画。
勾当台公園内のライブラリーパークを会場に、栗原の“手しごと”の魅力を伝えるイベントを開催。また、栗原市出身のダンス講師を招いて親子向けヒップホップダンス教室「だんすんぐKURIHARA」の開催、栗原の食材を使った「フォカッチャ作り教室」を開催する中で、市内のお母さんたちが楽しめる「場」を創出

くりはら まちクリエイター!!

大峯 由美子さん　田口 史織さん　岸 茉莉子さん

■お寺とアートと音楽と。

くりはら まちクリエイター!!

柳徳寺とのコラボ企画として「お寺とアートと音楽と。」を開催。
まちクリメンバーのほか、仙台圏・市内の協力者を巻き込み、これまでになかったアートと音楽の融合イベントを新たに創り出した。
また、市内各所で開催されたイベント等においてハンドパンを演奏する中で、音楽を通じた多くの交流の機会を創出

眞野 巌さん
安食 俊介さん
今井 太郎さん
山野辺 藍さん

▲左から安食俊介さん・今井太郎さん・眞野巌さん

■若柳地織を使った制作活動

くりはら まちクリエイター!!

桐井 萌花さん

栗原のＰＲに繋げる。さらには、伝統工芸品を後世に伝承していくということに繋げることを目的に、若柳地織を使った野良着を制作。
生地の作り手と製品の使い手の想いを繋げられるデザインにこだわった野良着を2着制作
また、今後、「若柳地織を使った商品企画・イベント・ＳＮＳ発信」の３つを軸に、栗原での活動を継続する意向

■若柳地織を使った制作活動

くりはら まちクリエイター!!

菊地 萌乃さん

若柳地織の包みボタンを使ったアクセサリーの制作を企画。
生地の風合いを生かした包みボタンを作ることで、ピアスや髪留めピンなど、価値を生かした新たな商品開発を創出
今後、活動を継続する中で、製品のクオリティを追及しつつ、地元栗原のチカラになっていきたい想いをもっている

■自社倉庫のリノベーション

くりはら まちクリエイター!!

只見 直美さん

商店街の活性化に向けて、まちくりメンバーと連携し、負の遺産と思われていた資源（自社倉庫）のリノベーションを企画検討。
「利用価値がない」「栗原では無理」という視点から、まちクリメンバーとの出会いによって、可能性のある資源として見直し、地域の子どもたちが楽しめる空間づくりに向けて継続活動中

▲発表者：田中一輝さん

■くりはら新聞

くりはら まちクリエイター!!

東京で建築を学ぶ大学生３名が「栗原新聞」を作成。外から見た若者視点での栗原の魅力や良さを発信。
また、新聞の企画として「栗原の今と未来」をテーマとしたトークイベントを２回開催し、住民・移住者・まちクリメンバーの新たな交流の場を創出

田中 一輝さん　大野木 一輝さん
後藤 眞皓さん

▲発表者：前芝優也さん

■ヤタイ設計

くりはら まちクリエイター!!

東京で建築を学ぶ大学４年生を中心に、栗原の「ヤタイ」を設計。
祭りの祝祭性や祭りを楽しむための配置を考え直すことを見据えた独創的なヤタイをデザイン
ヤタイを単なるお店の道具と捉えるのではなく、祭りそのものをもっと楽しむためのモノとしてデザイン

前芝 優也さん　大野木 一輝さん
後藤 眞皓さん　木村 拓哉さん

発行元
問い合わせ先
宮城県栗原市　企画部 定住戦略室
TEL：0228-22-1125　Email：teijyusokushin@kuriharacity.jp